

外国メディアの「Children of the Tsunami」を視聴して

「外国メディアが伝えた“震災”」ドキュメンタリーシリーズの中の「子どもたちが語る“あの日”：原題：Children of the Tsunami、制作：Renegade Pictures（イギリス 2012年）」を視聴した。

津波の怖さを身振りを交えて話す男の子、「将来は放射能を研究する人になって、みんなを助きたい」と、放射能警戒区域境界線直ぐ外側で避難生活をする女の子。

放射能汚染区域の片付けが終わっていない瓦礫を通学バスから日々目にしているからか、「ショベルカーを動かす人になりたい」と話す男の子。

首から掲げる放射能線量計は「ヒモが肌に当たると痛いから」と腰に工夫して付けている女の子、原発近くから避難して着ていた洋服を「ぜ～んぶ捨てられた。大事な服だったのに…」と話す女の子、等々。

制作者側のコメントを一切排して、主に小学生にマイクを向け、いま何を一番話したいかを淡々と聞いていく手法で編集された番組であった。

大地震と津波、そして放射能汚染で、肉親や友だち、自宅、学校、故郷等々あらゆる生活を根こそぎ奪われながらも、毎日の生活を送っている子どもたちが丁寧に静かに今の気持ちを飾らない言葉で話しているだけに、大地震、津波、放射能汚染の怖さ、悲惨さがより強く伝わってきた。

こうした良質の番組が、深夜しかも BS で放送されるよりも、みんなが見られる時間帯で再放送されることを願いたい。

番組の中で数少ない大人として、行方不明だった我が子が遠く離れた所で見つかり、津波でもまれたからか、傷んでいた遺体の状況をもの静かに話す母親が、強く印象に残った。

あんなに膨大な震災関係の報道があったのに遺体の状況に触れた報道が殆どなかっただけに、英国の放送局だから可能なのかな？ 日本の報道機関では日本人の精神風土（ex. 死者に鞭打たない）故に自主規制が働いてしまうのかなと、ふと思った。

遺体の傷んだ様子を知りたいということだけでなく、こうした悲惨な状況と向き合いどう受け止めようとしているかという遺族の心情に思いを馳せることからこそが、被災された方々の真の姿に迫ることができ、我々自身があの震災を絶対に忘れないことに繋がるような気がするのだが…。